

中国・雲南省少数民族の収納家具

デザイン学科 スペースデザインコース

車 政 弘

Traditional chests and containers of minority nationalities
in YUNNAN CHINA

Masahiro KURUMA

1. 序

中国西南部，雲南省の少数民族の生活文化については照葉樹林文化論が提起される中で，日本の基層文化を捉え直す立場から注目を集め，多くの栽培植物学，民族学的成果が発表されてきた¹⁾。また，東南アジアと中国雲南省にかけての民族学的，建築学的調査も実施されてきた。この間に多くの居住文化についての知見が得られている²⁾。

しかしながら居住に付随する，家具や生活用具等の，生活の詳細を物語る物質文化については記述されることが少なかった。本論では主として雲南省の少数民族の住居内で生活財，生活用品を保管する収納系の家具，用具がどのようなものであり，それらがどのように使用されているか明らかにし，考察しようとするものである。

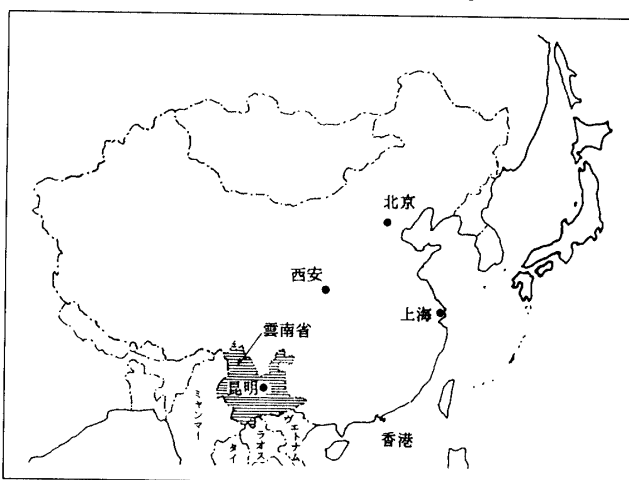


図1 調査地雲南省

2. 調査概要

調査地とそこに居住する少数民族はラオス，ミャンマーと国境を接する西双版纳(シーサンパンナ・シーブソンパンナ)傣(タイ)族自治州。この州都景洪(チンホン)を中心とする地域に居住する傣(タイ)族(タイルー=水タイ族，タイヤー=花腰タイ族)，基納(ジノー)族，布朗(プラン)族または布朗傣(プランタイ)族，愛尼(アイニー・ハニ・アカ)族，拉布(ラフ)族，雲南省都，昆明近郊の彝(イ)族の枝族，撒梅(サメ)族，路南彝(イ)族自治県の撒尼(サニ)族，楚雄市近郊の漢族，南華県の彝(イ)族，大理の白(ペー)族，徳宏傣(タイ)族景頗(チンポー)族自治州の徳宏タイ族(傣那，タイナー=早タイ，傣泐，

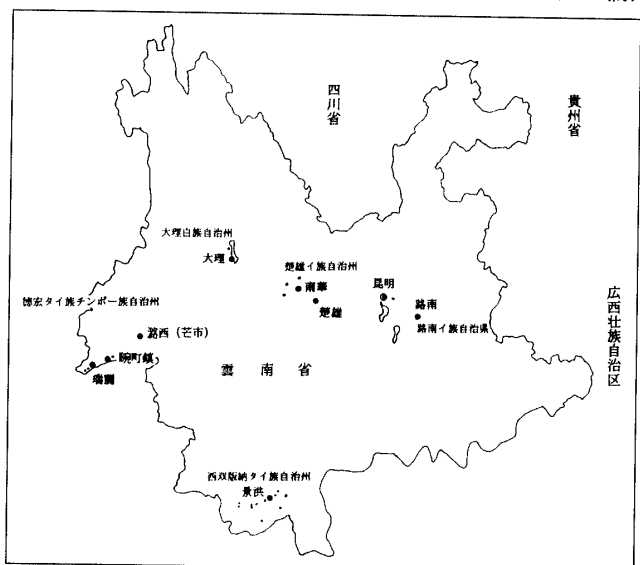


図2 雲南省調査地詳細

タイラー=水タイ族), 景頗 (チンポー) 族の14民族である (図-1, 2)。

雲南省の少数民族は24民族であり, ここではその半数を少し超えるくらいが対象となる。

なお, 民族名は便宜上, 本論ではカタカナ表記とする。

なお, 調査日時は1990年8月21日-9月4日, 1991年8月15日-8月30日の期間である。

調査室内は1990年15軒, 1991年17軒ほど³⁾である。

図表の数値の単位はmm, 原則として幅*奥行き*高さの順に表記する。

3. 空間構成の概要

3-1 シーサンパンナタイ族の住宅概要

まず, シーサンパンナ, 州都チンホン付近の, 主としてタイ族の室内を中心に検討しよう。

雲南省の少数民族の住居については, 馬寅の『概説中国の少数民族』に詳しい。まず, これによって住居の様子を見てみたい。「南方の少数民族地区において, 特徴があり, そのうえ最も普遍的に見られる住居は「干欄」(高床式)である。干欄型の家屋は「麻欄」(マーラン) もしくは「閣欄」(カラン) 「葛欄」(カラン) とも呼ばれている。⁴⁾

「雲南省シーサンパンナ・タイ族自治州のタイ族の竹の家は, 典型的な早期干欄型家屋である。シーサンパンナの住居の中心は, 竹と木で作られた方形に近い上下2層の家で, 階上に人が住む。地面から約2メートル前後離れ, 数本の木材を柱

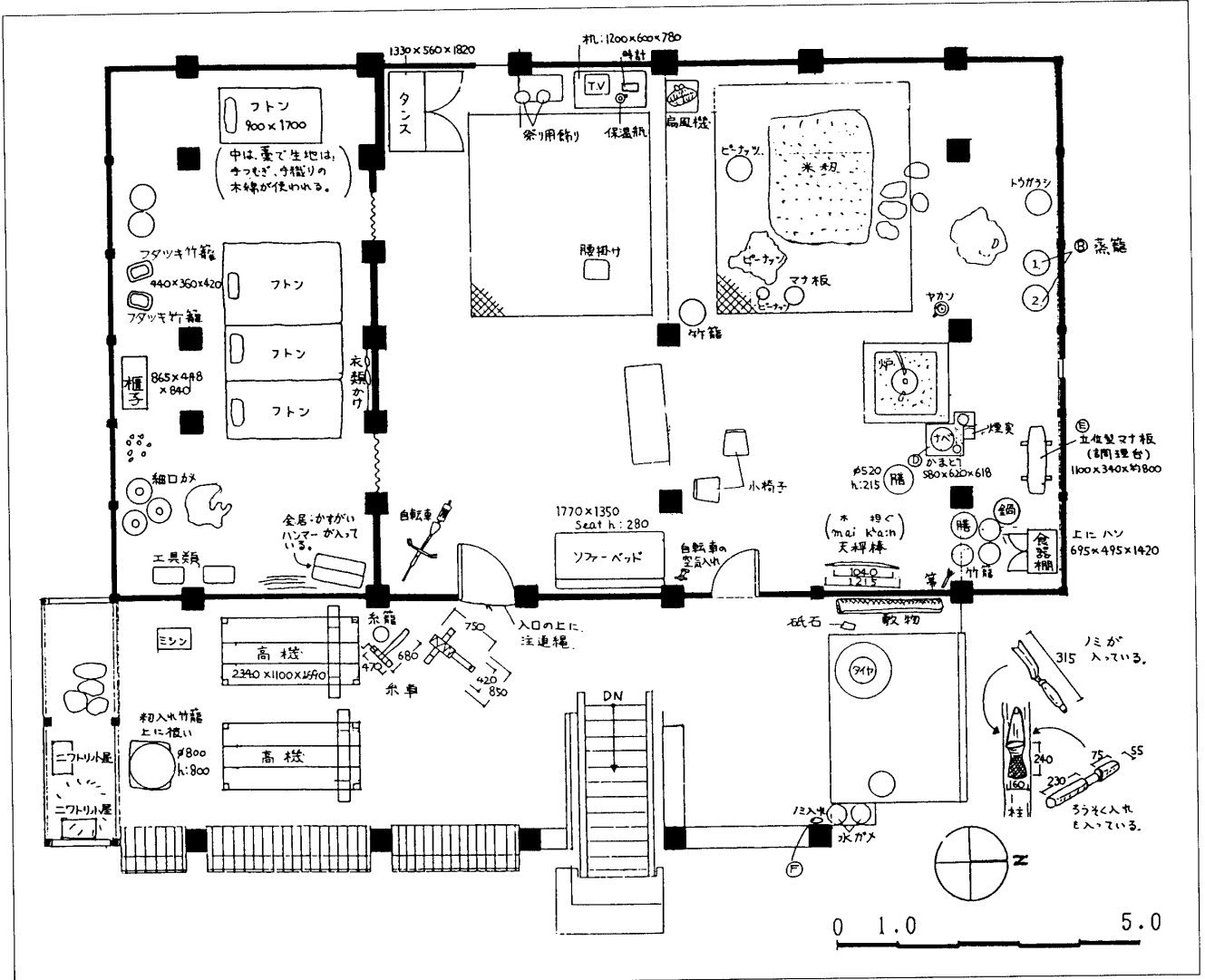


図3 シーサンパンナ タイ族の住居平面図 (マンチンタイ) 階上部分のみ

とし、階下は壁がなくて空いており、そこに、家畜や家禽が飼われ、米つき場及び農具や物置場に利用される。入母屋式の屋根は傾斜していて、草でふかかれている。階段を登ると縁とテラスがあり、物干しや納涼の場となる。室内は寝室の奥の間と表の間との二つに分けられ、寝室では数世代の男女がむしろ敷の床で眠る。表の間はお客を接待する場であり、家族の居間でもある。表の間の戸口近くにはいろいろがあって、煮炊きや暖房、照明に用いられる。壁と床板は太めの竹を裂いて平にしたもので、その多くは窓がないが、日差しと風は、竹と竹のすきまからもれてくるのである。⁵⁾

この記述の中には、例えば炉の位置が戸口近くにあるとされるが、私達の調査では戸口から離れている場合もある。また壁の素材が竹であるとなっているが、現在ではむしろ木材の板が使用されている例がほとんどであるというように、現在の

タイ族の住居とは異なる点もある。また、むしろ敷の床に寝るといふ点も異なり、調査した例では布団が敷かれている家がほとんどである。このような違いはあるが、かつての概要を読み取ることができる。

概ねシーサンパンナの高床住居では階上の居間は接客空間でもあり、日常の食事のコーナーも含むものである。そこには食器棚、飾り棚が登場し始めている。それらは現代中国の共通した形態で、新様式として受容され始めているということが出来る。寝室は簡単な板壁で仕切られ、この壁は構造的には自立している。屋根裏に接する壁ではなく、書き割りの自立したような壁で居室部分と分割されている。(図-3)は柱が焼成レンガ積み住居である。もともとは構造も竹であり、それが木構造へと変化し、漢族の影響を受けて焼成レンガの柱へと変化したものである。

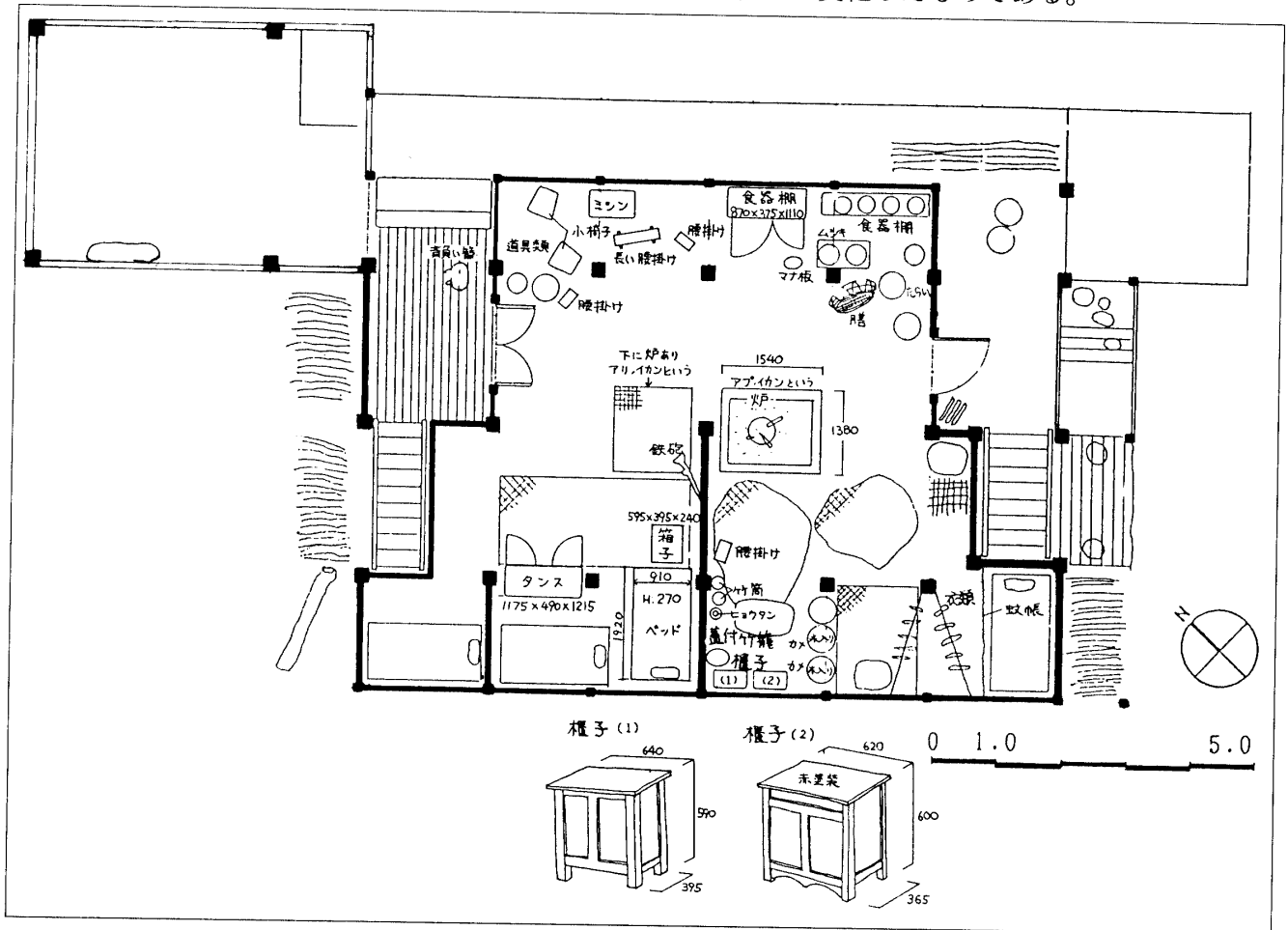


図4 アイニー族の住居平面図(パラ・巴拉)階上部分のみ

シーサンパンナ、アイニー族の住居の特徴は高床であることはタイ族と同様であるが、男の空間（接客空間＝アリ・イカン）と女の空間（日常の空間＝アプ・イカン）に分離されていることである。出入りする階段も2つあり、男女の空間区分が厳密である。そのため適齢期になった娘は階下に別の寝室を設ける。集落には比較的規模の大きい若者宿があり、若い男は共に寝起きする生活がある。（図-4参照）

3-2 徳宏州タイ族チンポー族自治州のタイルー（水タイ族）の住宅概要

高床住居ではあるが、シーサンパンナのそれとは趣を異にしている。階下部分は物置の部分もあるが、食事の空間がとられ、椅子とテーブルが置かれた居室の機能も付加されつつある。竈屋は平屋で入母屋の主屋に接する形となっている。竈屋と食事の空間は隣接開放空間となり、食器棚や食卓が置かれる。階上は入口に近いコーナーに仏壇が置かれ、居間と寝室の構成だが、居間は通常、接客空間としての性格を持ち、また信仰の空間である。日常の居間的空間は階下に設けられることが多くなっている。主要な構造は木材だが壁面には竹の編組が多く用いられる。（図-5参照）

3-3 土間式住宅概要

路南、昆明、楚雄、大理、潞西（芒市）などの土間式住居の形式は概ね次の通りである。

路南イ族（サニ族）自治県では（図-6）のようであり、外側から見ると壁で屋根の荷重を支える壁立ち構造のようである。しかし、内側に入ると、梁が見え、木構造であることが分かる。つまり、分厚い土壁は上部の荷重とは関係のないものであることがわかる。入って正面、中央部分は祖先祭祀の空間となり、その手前が食事やくつろぎの空間になり、その両脇に寝室が設けられる。

昆明近郊サメ族の住居は構造としては前述のサニ族と同様なものであるが、その形式は一顆印型と呼ばれる⁶⁾。この住居は漢族の住宅形式であり、正房のしつらえは祖先祭祀空間となっており、大

型の収納家具は2階の寝室に置かれる。食事空間が厨房に近接する形も多い。（図-7参照）

楚雄近郊、哨湾村の漢族の住居では厨房部分と居間部分の拡大がみられ、その結果穀物のストックの場が分離され、居間にはソファが配される。2階は倉庫となっている。（図-8参照）

南華県イ族の木楞房は井干式とも呼ばれるが、校倉造りと同様な木材を井桁に積み上げる累木式工法、木壁組積構造である。主屋部分は土壁が取り巻くが倉庫、畜舎の部分は典型的な木楞房である。（図-9）のように居室に炉があり、鉄輪（五徳）があり、ヤカンがかけてある。この火はけっして絶やすことがない。家を空けるときには炉の火が激しく燃えることなくくすぶるようにして、出かけるという。

イ族の土掌房は現在漢族様式の瓦屋根に置き換えられているので、『雲南民居』に紹介されるような1つの集落全体が陸屋根の土掌房で形成されている景観には出会わなかったが、南華県天申堂では典型的な土掌房があった。

大理ペー（白）族の伝統的民家は3坊1照壁と呼ばれる構成で明るい中庭を有する。全体にきわめて装飾的で華麗な姿を持つ住居である。中庭には花木の鉢植えが多く配されている。中庭を囲む部屋数も多く、家具の保有量は群を抜いている。（図-10参照）

潞西（芒市）の早タイ族の住居は居室、寝室の棟と厨房棟、倉庫、納屋で中庭を囲む形式で、居室、寝室棟は基壇を有し、平屋である。（図-11参照）

4. 収納家具・収納具の種類と対応空間

家財を保管するために収納系の家具があること自身、各家庭の豊かさを表現するものである。シーサンパンナのタイ族の生活用具については「昔から「タイ族の引っ越しは荷物3個」と言われたほど家の財産はきわめてわずかだった。田畑は個人のものではなかったから、穀物、役畜、衣類くらいが個人財産なのであった⁷⁾。確かに現在でもタイ族の生活用具は簡単な構成である。まず、収納系の家具についてみてみることにする。

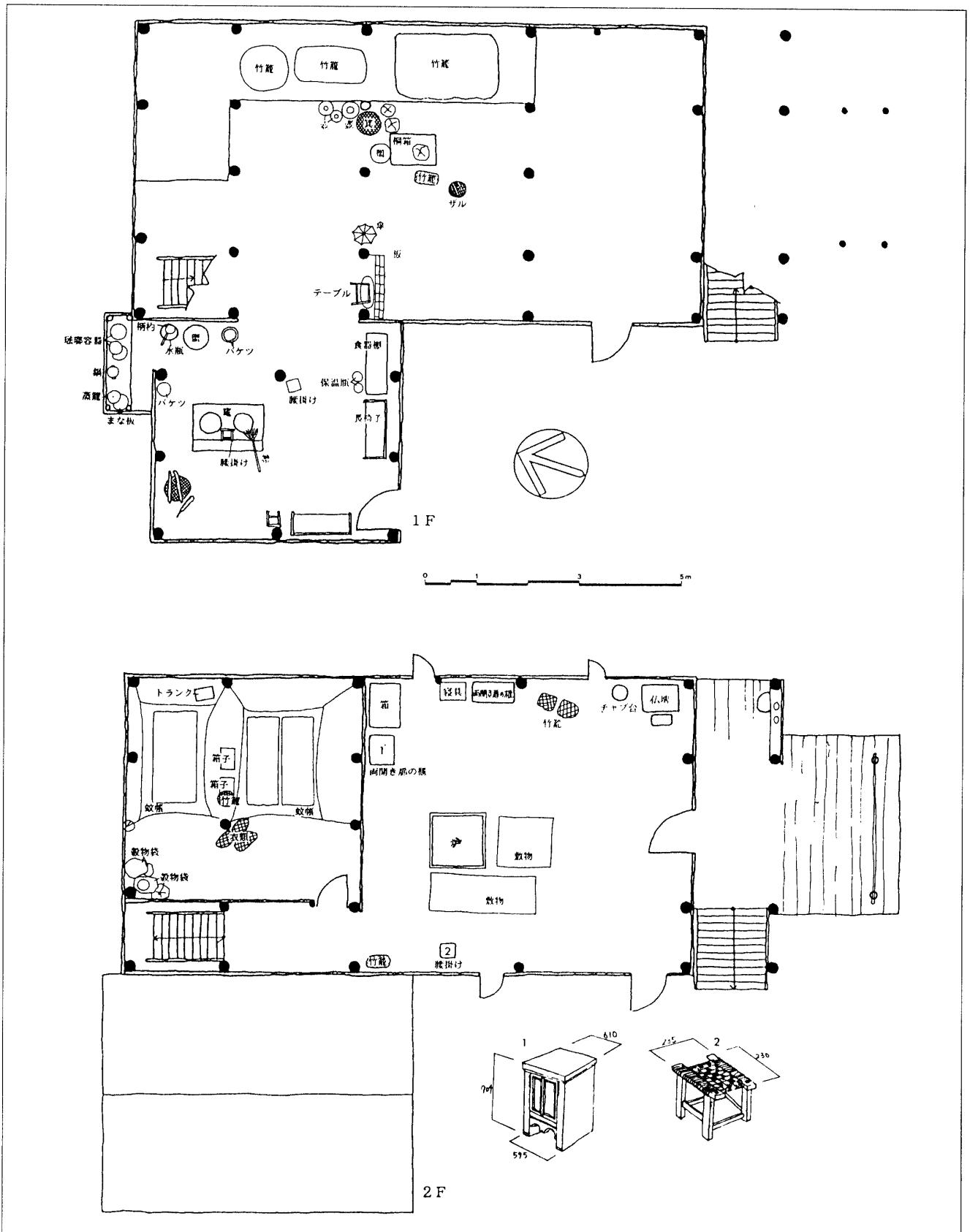


図5 徳宏タイ族チンポー族自治州水タイ族の住居平面図（喊沙寨）

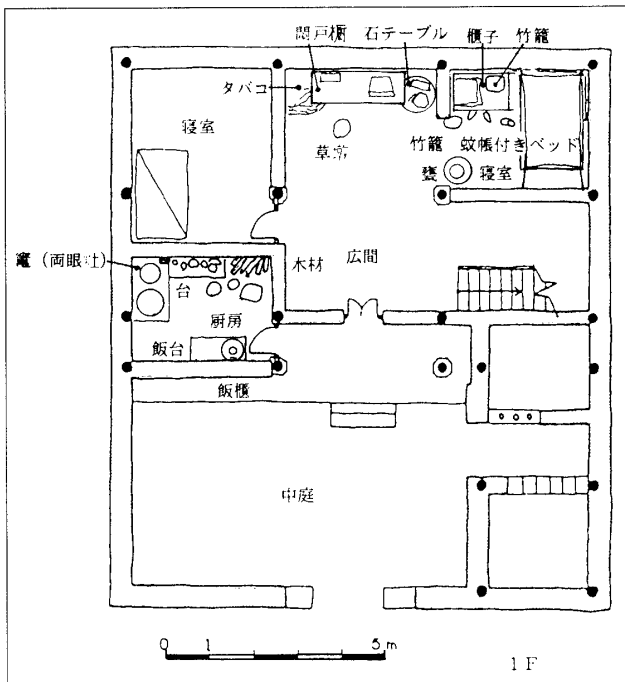


図6 サニ族の住居1階平面図(路南イ族自治州北大村後首田) 2階省略

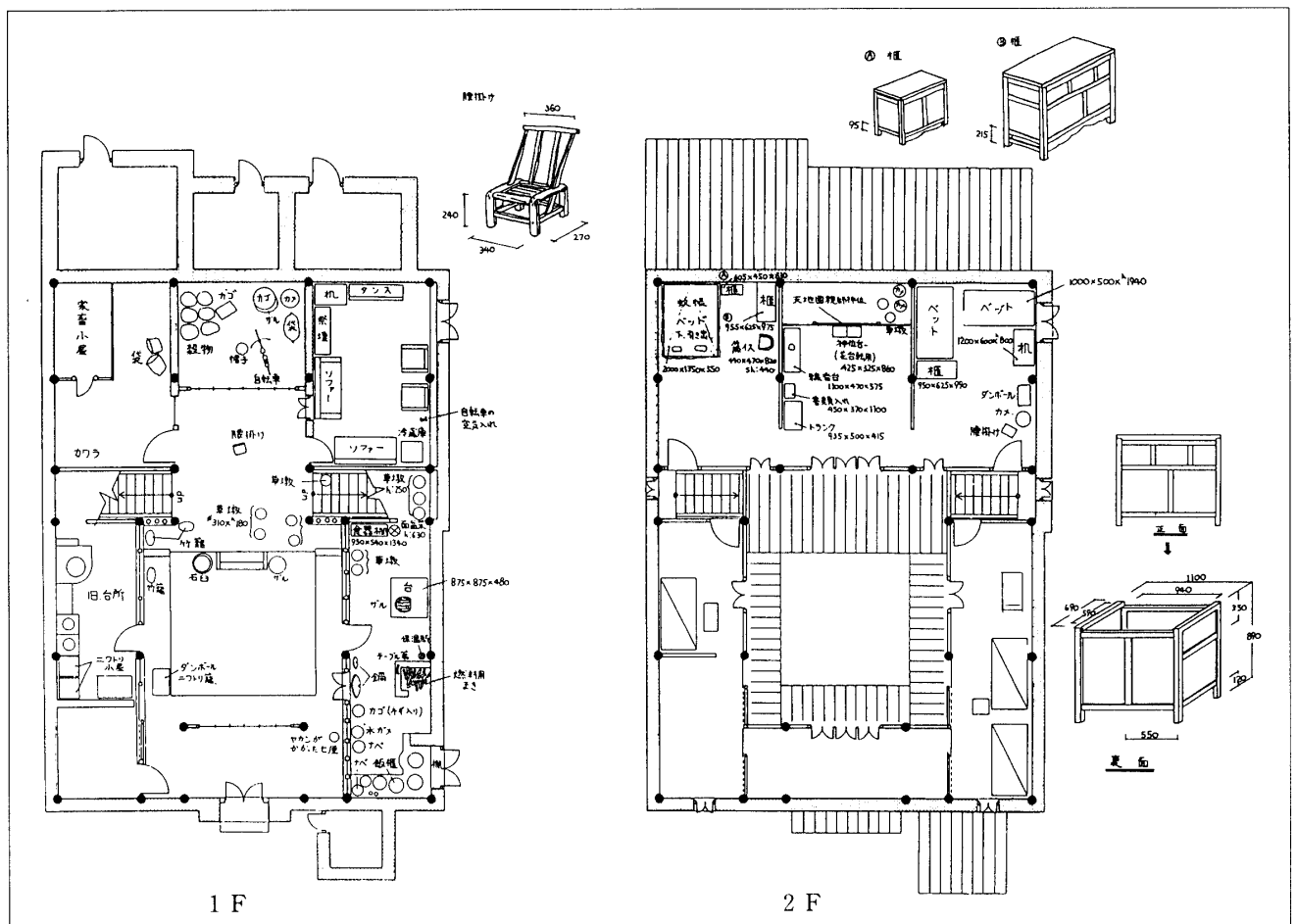


図7 サメ族の住居平面図(昆明郊外)

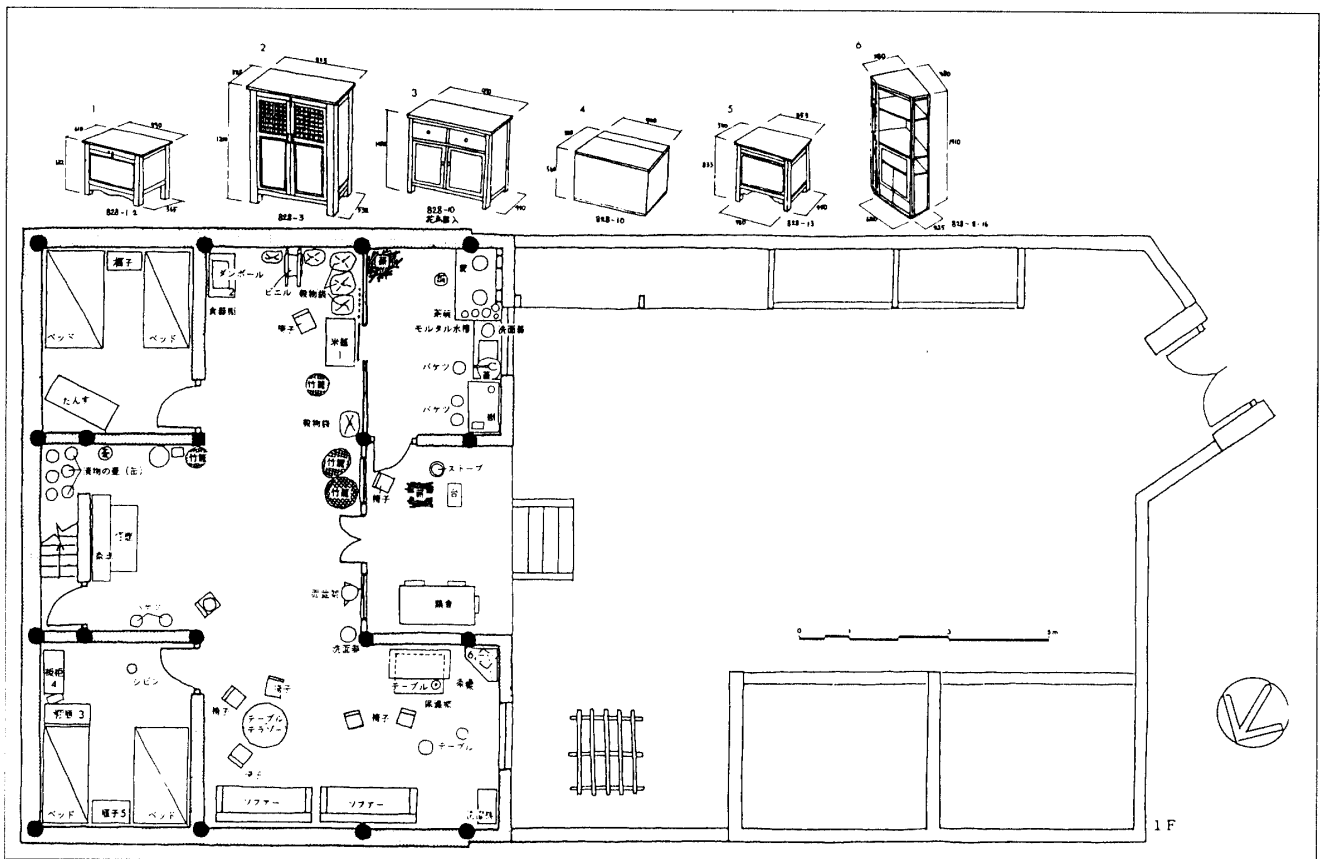


図 8 漢族の住居平面図（楚雄近郊 哨湾村）2 F 除く

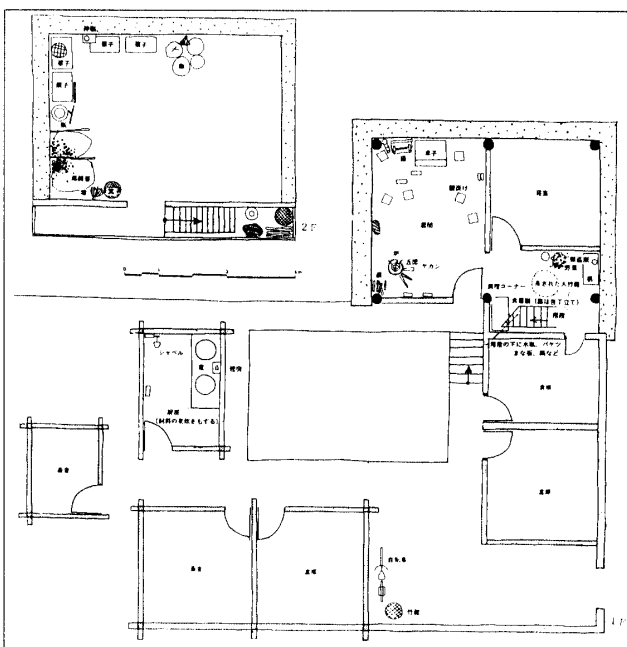


図 9 南華県イ族の木楞房平面図（岔河）

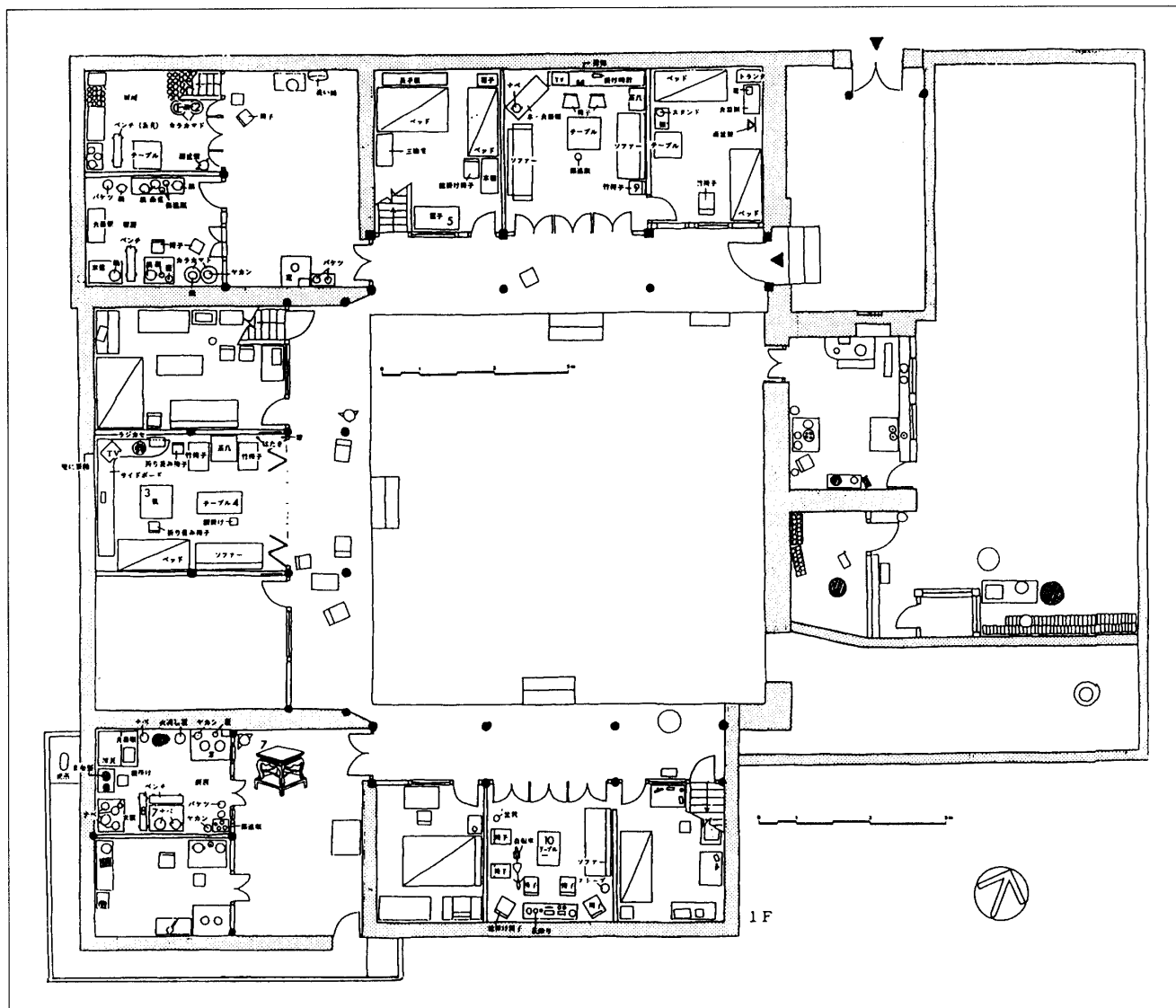


図10 大理パー族住居平面図（大理巷屏街5号）2階省略

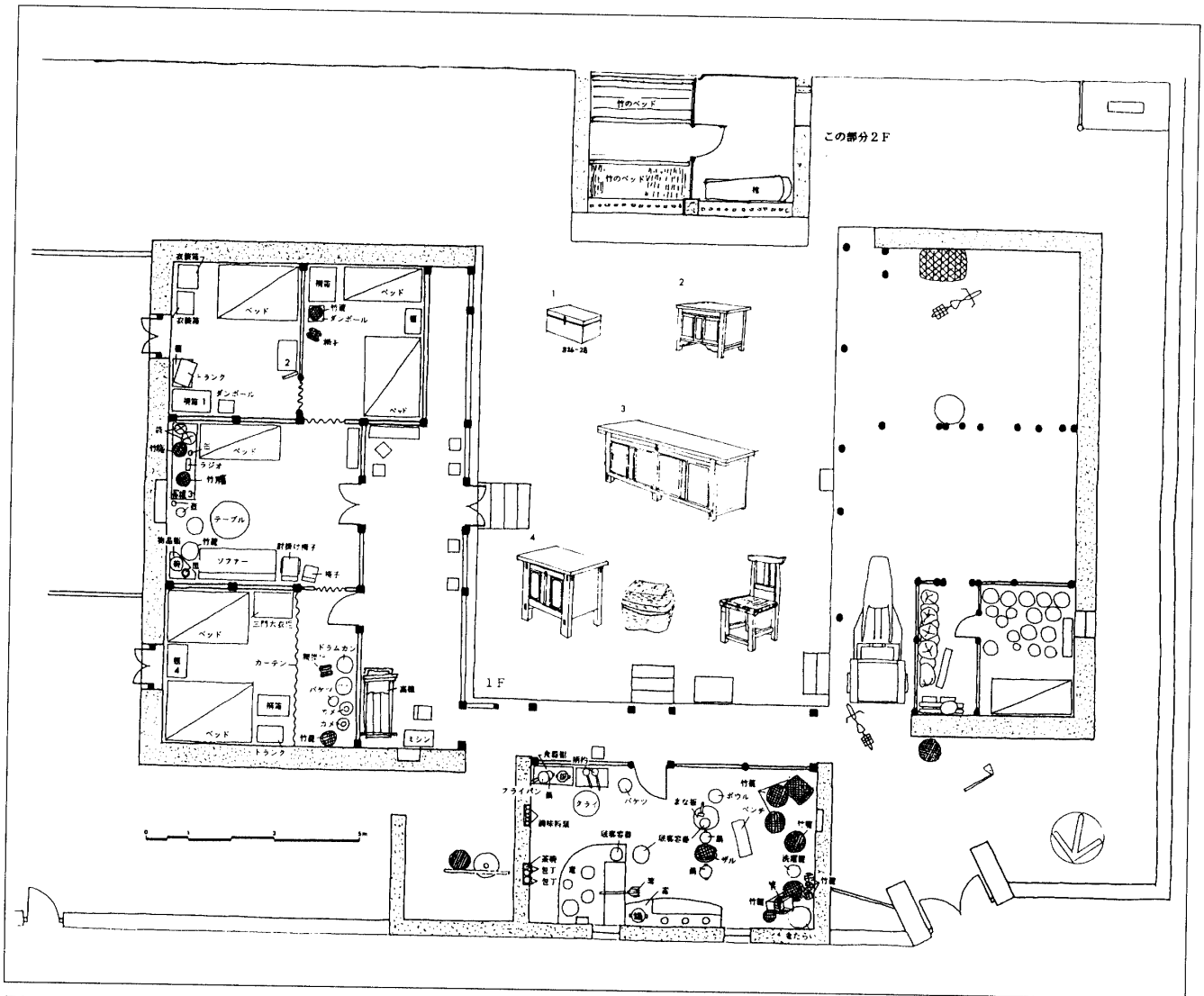


図11 タイナー（早タイ族）の住居平面図・部分（芒市・丙門寨）

表1に見るように4の花腰タイ族、三達族の土間式住居を含め寝室が調査できなかった住居を除き、蓋付き竹籠は共通して寝室に保有される収納家具である。また框（かまち）組の櫃子も共通している。また、食器棚は新しい様式のもので、これは共通している。主として居間に置かれるタンスも現代中国様式と呼べるものである。12の近代的な組合せ家具は間仕切り兼収納家具兼飾り棚といえるもので、中国の農村の富裕層に浸透しは始めている。この種の収納家具の紹介は都市部の書店で多く見かけられるものである。そうした情報媒体によって居間の内部景観は変化し始めている。

トランクや箱子(シャントー)もわずかに保有され

ている。

蓋付き竹籠「クオエイ」(図-12, 13)がタイ族の基本的な収納家具であることは、他の生活用品がほとんど竹製であることから首肯できる。この蓋付き竹籠の形と編組が非常に緻密であることや、置かれる位置が布団やベッドの枕元や脇であることから、貴重品入れであることが読み取れる。それは、成人の個々人に1つずつ用意され、個人に属する収納家具であるといえよう。中に収納する貴重なものとは衣類、織った布、肩掛けのバッグ、そして、小さな刃物類や、寺で灯すための細く、黄色の蠟燭をいれる小さな蓋付きの竹籠などである(図-14)。

表1 高床式住居の収納家具(シーサンパンナタイ族自治州)

番号	民族・地名	収納具名称	材料	数量	設置位置
1-1	水タイ族 (タイルー) マンモン	蓋付き竹籠	竹	3	寝室A
		櫃	木	3	寝室A
		食器棚	木	2	居間・新築居間
		たんす	木	1	居間
1-2	水タイ族 (タイルー) マンスンマン	櫃	木	3	寝室
		蓋付き竹籠	木	2	寝室
		食器棚	木	1	居間食事コーナー
		箆筒兼TV台	木	1	居間
1-3	ジノー族 マントウ	櫃	木	1	居室
		蓋付き竹籠	竹?	1	寝室
		米入れ	木	1	寝室
		食器棚	木	1	食事コーナー
1-4 *	花腰タイ族 (タイヤー) マンチンファ	箱子	木	2	寝室
		蓋付き竹籠	木	1	寝室
		トランク	木	1	寝室
		たんす	木	1	居間
1-5 *	達族(漢族) 五家	食器棚	木	1	食事コーナー
		寝室調査せず			
1-6	フラン族 ノンヤン	櫃	木	2	寝室
		蓋付き竹籠	木	1	寝室
1-7	タイ族 (タイルー) マンホウ	米入れ	土器	2	寝室
		櫃	木	1	寝室
1-8	ラフ族 巴拉小	蓋付き竹籠	木	1	寝室
		米入れ	土器	2	寝室
		櫃	木	1	親親1+1+娘の寝室
		箱子	木	1	親親コーナー
1-9	アイニー族 巴拉	櫃	木	2	女の寝室
		蓋付き竹籠	木	1	女の寝室
		米入れ	土器	2	女の寝室
		箱子	木	1	男の空間
		箆筒	木	1	男の空間
1-10	アイニー族 巴拉	食器棚	木	1	女の空間食事1+1
		櫃	木	1	女の寝室
		蓋付き竹籠	木	1	女の寝室
		箱	木	1	女の寝室
		米入れ	竹	1	女の寝室
1-11	タイ族 マンチンタイ	箆筒	木	1	居間(共用空間)
		櫃	木	1	寝室
		蓋付き竹籠	木	2	寝室
		箆筒	木	1	居間
1-12	タイ族 マンガンロン	食器棚	木	1	食事コーナー
		寝室調査せず 組合せ家具	木	1	居間
1-13	タイ族 1軒に2家族 マンチンタイ	食器棚	木	1	寝室A 寝室B 寝室C
		櫃	木	3	寝室A
		トランク	木	1	寝室A
		蓋付き竹籠	木	4	寝室A 寝室B
		箆筒(三門)	木	2	居間A 居間B
		TV台・飾り棚	木	2	居間A 居間B
		食器棚	木	1	居間A

1990年8月調査 *印は上開式住居

現在はこれに加え、「リム」と呼ばれる櫃子「クイズ」が寝室の同様の位置に置かれている。サイズは各種だが、総て前板、側板、背板は框組構造で框組の部分や鏡板の分割に差異はあるものの、上蓋開口の方法は同様である(図-15)。

蓋付き竹籠はひとりで持ち運びができる大きさだが、櫃子は運ぶとすれば二人が必要な大きさである⁸⁾。この竹でできた蓋付き竹籠と木でできた櫃子の組合せは少し検討する必要がある、特に櫃子は削りものでもなく、曲げものでもなく、また指物技術のうち板材の組合せではなく、框組構造になっているのである。木工技術上、かなり新しい

指物技術が用いられていることに注意しなければならない。つまり、タイ族の中で発展してきた技術とは考えにくいのである。外来のデザインと技術が伝播したと考える方が妥当であろう。雲南省漢族の櫃子が少数民族の生活の中に入ってきたのではないかと考えられる。櫃子に用いられる樹種は比較的硬いチーク材のように見て取れるものや、マツ材などの場合がある。ヒンジは蓋板のうしろの部分で軸吊り蝶番になっており、この形の櫃がどの地方に分布しているものか、1990年の調査では明確なことは分からなかった。

櫃子が蓋付き竹籠と違う点の1つとして、櫃子の場合、施錠できるようになっていることで、この家具になると家の扉の鍵も含め、主婦の管理下におかれる。タイ族の既婚婦人は銀のベルトを母親から譲り受け、非常に大切にしている。その銀製のベルトに、鍵束を提げている(図-16)。収納具が蓋付き竹籠の段階では鍵をかけるということはなく、枕元に置き、紐で縛っているだけだった。蓋付き竹籠は1人で持ち運びができるものであり、壊そうと思えば簡単に壊れるようなものである。

その置かれる位置が、そこに収納されるものの重要性を物語っている。通常、他人は寝室には入ることは許されない。寝室に他人が入ることはタブーである。もし、その禁を犯した場合、殺されてもやむを得ないという厳しい考え方が成立している。そうした社会的結界を設けることで、寝室のプライバシーと、生活財保管の安全性を確保しているのである。

またシーサンパンナタイ族に特徴的な収納具として素焼の土器を挙げることができる。比較的少ないが土器の米入れ(種籾入れかも知れないが調査時点では確認していない)も注目される。穀物の保管は高床式住居の場合、通常階下部分に倉庫を設置して行う。従って、寝室の土器に入れられた米は種籾、あるいは脱穀した米ということになる。種籾、あるいは脱穀した米を入れる土器の形態は古代から継続してきた形態で、寝室の片隅に置かれる。シーサンパンナのフラン族の寝室では注連縄(しめなわ)を土器に張り、種籾入れとしている例は印象的

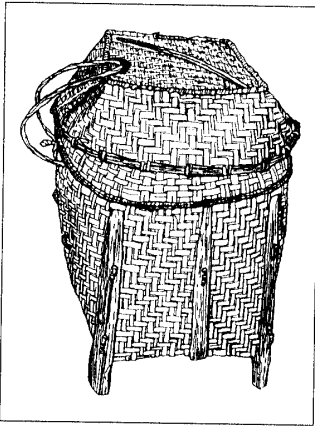


図12 タイ族の蓋付き竹籠 (490*300*400)
マンスンマン



図15 タイ族の櫃子 マンチンタイ。左側に紐で縛った蓋付き竹籠が置かれる

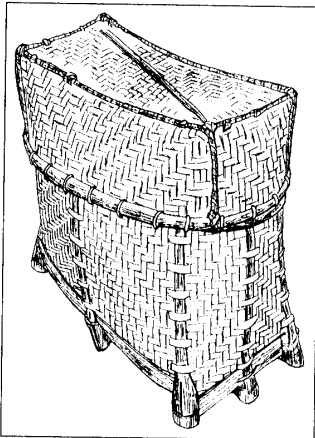


図13 タイ族の蓋付き竹籠 マンホウ

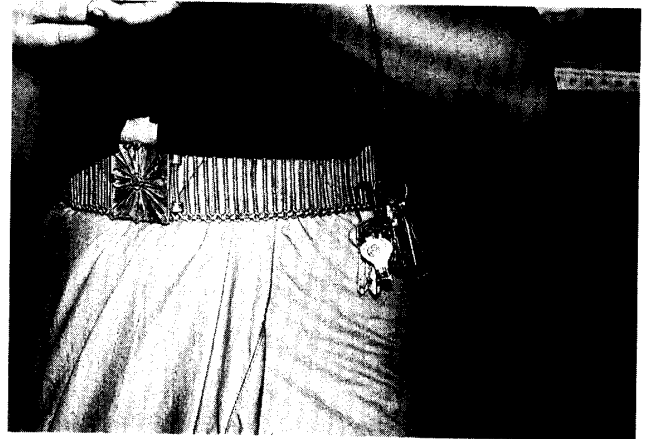


図16 母親から譲られた銀のベルトに鍵束を下げる

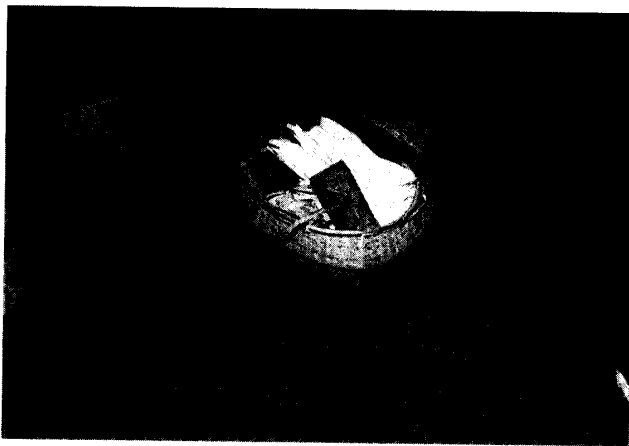


図14 蓋付き竹籠。左上に土器が見える

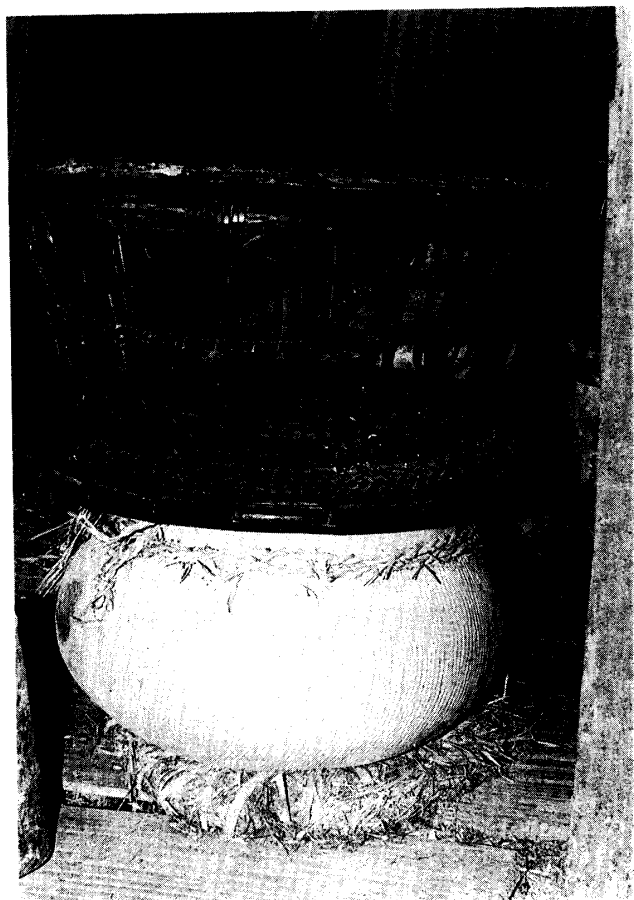


図17 しめ縄を張り米（種粳）を入れた土器。蓋には古くなった膳が使われる。

である（図 17）。

口が大きくふっくらと張った胴のこの土器は露台にも置かれ、飲料水用や洗顔、歯磨き用の水がめとしても多く用いられている。

主としてシーサンパンナの収穫物や生活財を収納保管するためのものとして大別すると、1) 寝室に置かれ穀物入れとして使用される土器、2) 寝室に置かれる蓋付き竹籠、3) 同じく寝室に置かれる脚付きの框組櫃子、4) 居間または炉の近くに置かれる食器棚、5) 居間に置かれるTVを組み込む形式のものから、さまざまなタイプの現代的収納家具であり、寝室の若干の箱子やトランクとなる。

つぎに表2について検討する。徳宏タイ族チンポー族自治州のタイナー（早タイ族）の住居ではかつて使用していた蓋付き竹籠はシーサンパンナの

表2 高床式住居の収納家具（徳宏タイ族チンポー族自治州）

番号	民族・地名	収納具名称	材料	数量	設置位置
2-1 *	早タイ族 芒市内門	櫃 (quiwon)	木	5	寝室1 寝室2 寝室3 居間
		蓋付き竹籠	竹	1	?
		箱（脚無し）	木	5	寝室1 寝室2 寝室3
		箆筒 トランク	木	1 2	寝室3
2-2	水タイ族 瑞麗 沙	箱子	木	3	寝室 居間
		トランク	木	1	寝室
		竹籠	竹	7	寝室 居間
		両開き箆筒 箱（脚無し）	木	2 1	居間 居間
2-3	水タイ族 瑞麗 沙	寝室調査せず 竹籠	竹	2	居間
2-4	水タイ族 瑞麗等	寝室調査せず 竹籠 箱子	竹 木	2 2	居間 居間
2-5	水タイ族 瑞麗等	箱（脚無し）	木	2	居間（他に箱子2
		櫃 瓶	木 土器	1 1	階下 階下 竹籠等あり
2-6	水タイ族 瑞麗 沙	箱（脚無し） 竹籠	木 竹	1 2	居間 居間
2-7	水タイ族 瑞麗 沙	箱（脚無し） 箱子	木 木	1 4	居間 寝室 一栖住居
2-8	チンポー族 勐董弄村	箱（脚無し）	木	1	居間
		櫃	木	2	寝室 大小

*早タイ族は上間型住居であるが、地域的特性が水タイ族の住居とも関連するので、この表に組み入れた。

形態とサイズはほぼ同様である。しかし、現在ほとんど使用されていない。表2中2-1の潞西(芒市)の家でシーサンパンナでみた蓋付き竹籠の図を主人に見せたところ、「わが家でも昔は使っていた」と物置から取り出してくれたものである。タイラー（水タイ族）の住居ではこの形態は見ることはなかった。

徳宏タイ族チンポー族自治州の調査地は瑞麗、潞西(芒市)、畹町、いずれもミャンマー(ビルマ)と隣接しているため、框組櫃子とともにミャンマー(ビルマ)型の脚なし板櫃との並存状態である。ただ、寝室をはじめ居間などにも蓋なしの竹籠は衣類入れとして用いられていることもある。

シーサンパンナと同様の形態の土器はここでは水がめとしての使用法に限定され、穀物を入れる例はなかった。

脚付き框組櫃子は2-1の住居には4例あり、特殊な例として居間の奥に置かれた大きな櫃子が挙げられる。幅が広いことが特徴であるが基本的な構造は他の脚付き櫃子と同様である。両サイドが片開き扉となっているところが異なる点である（図-18）。

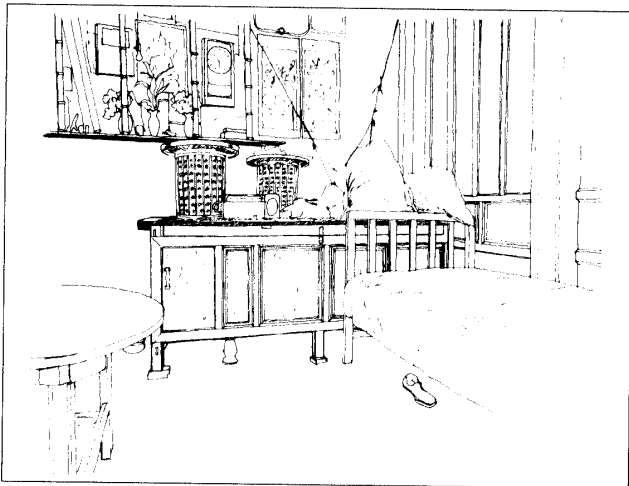


図18 早タイ族の框組櫃子（潞西）

表3は土間式住居に保有される櫃子の例である。土間式住居は漢族もしくはイ族(サニ, サメ族はイ族の枝族), そしてペー族が居住する。

土間式住居には竹の収納具は見られない。框組櫃子の置かれる位置は寝室, 倉庫, 広間, 居間, 厨房と広がりがある。米や穀物櫃としての用途, 塩漬肉の保管箱としての用途, そして食器が収納される場合もある。穀物, 塩漬肉等の食品保管に供される場合は屋根裏や別棟倉庫の例もある。

3-7の例は脚付き框組櫃子ではなく板櫃である。

ところで収穫物の保管は住居に限ったわけではない。たとえば南華県のイ族の例では馬鈴薯の保管は住居とは離れた木楞房の倉庫群であるように村落の保管庫が独立する場合もある。

表3 土間式住居の櫃子(クイズ)のサイズ

番号	地名・村名	民族	位置	個数	サイズ(W*D*H)mm	備考	
3-1	路南イ族自治州北大村后首田	サニ族	1F寝室	1	996*560*945	rugu	
3-2	昆明近郊小石	サメ族	2F寝室	2	955*625*975	穀物櫃 破損	
			2F寝室	1	950*625*990		
			2F倉庫	1	1100*690*890		
3-3	南華縣岔河	イ(彝)族	2F倉庫	4	不詳		
3-4	南華縣五街郷義還廠倉蒲	イ(彝)族	2F倉庫	1	1100*675*930		
3-5	南華縣五街郷義還廠倉蒲	イ(彝)族	2F倉庫	1	880*530*745	塩漬け肉保存	
3-6	南華縣五街郷老五街村	イ(彝)族	1F広間	1	925*540*820		
			1F寝室	1	990*585*820		
			2F倉庫	1	925*540*820		
3-7	楚雄近郊 靈宮橋	漢族	1F居間	1	不詳	板櫃 板櫃	
			1F厨房	1	不詳		
			2F倉庫	2	不詳		
3-8	楚雄近郊 哨湾村	漢族	2F倉庫	1	795*510*740		
3-9	楚雄近郊 哨湾村	漢族	1F寝室	2	853*500*833	施錠 塩漬け肉保存 * 米櫃	
			1F広間	1	990*610*682		
3-10	天申堂	イ(彝)族	倉庫	3	1175*700*870	米櫃 食器 * 棺2 米櫃	
							930*585*760
							760*455*672
3-11	大理巷屏街5号	回族 (白族)	北寝室	1	820*640*835		
			厨房	1	984*760*755		

5. 雲南省少数民族の収納家具・収納具の特徴

5-1 蓋付き竹籠

(図-12, 13)にみるような特徴的な形態で、はじめてこの収納具を見たとき、葛籠(つづら)という名称が口をついて出てきた。しかし、葛籠は「くずのつるを編んでつくった、衣服などを入れる籠。のち、竹・ひのきの薄板を編んで箱型につくる。」⁹⁾とあり、日本の葛籠ほどの直線の形態ではない。また、タイ族語の呼称クオエイ(quoey)はその音が日本や韓国の「行李」(コオリ)に非常に近いことが印象的であった。行李は確かに住居の中でも収納具として使用されてきたが、もともとの意味から旅行など移動する際に携行するものであった。携

行するには都合のいい大きさではあるが、この蓋付き竹籠の現在の使用法や形態の独自性から行李と称してはやや不適切な感がある。このシーサンパンナの美しい収納具を「蓋付き竹籠」とここでは称することとした。

(図-15)の左側の蓋付き竹籠は編組の内側に太い竹の部材が入っているが、底面が床に接する形態である。しかし、(図-12, 13)は構造的には日本や韓国の行李とは異なり、底の部分が床面に直接触れないように箱型の四隅、あるいは4隅と側の中央部に力骨が入り、床面から底が浮いた状態になるようになっている。その形態は運搬の側面より置いておくことに留意していると読み取れる。身と蓋の関係も、内容物により深さに融通性がある

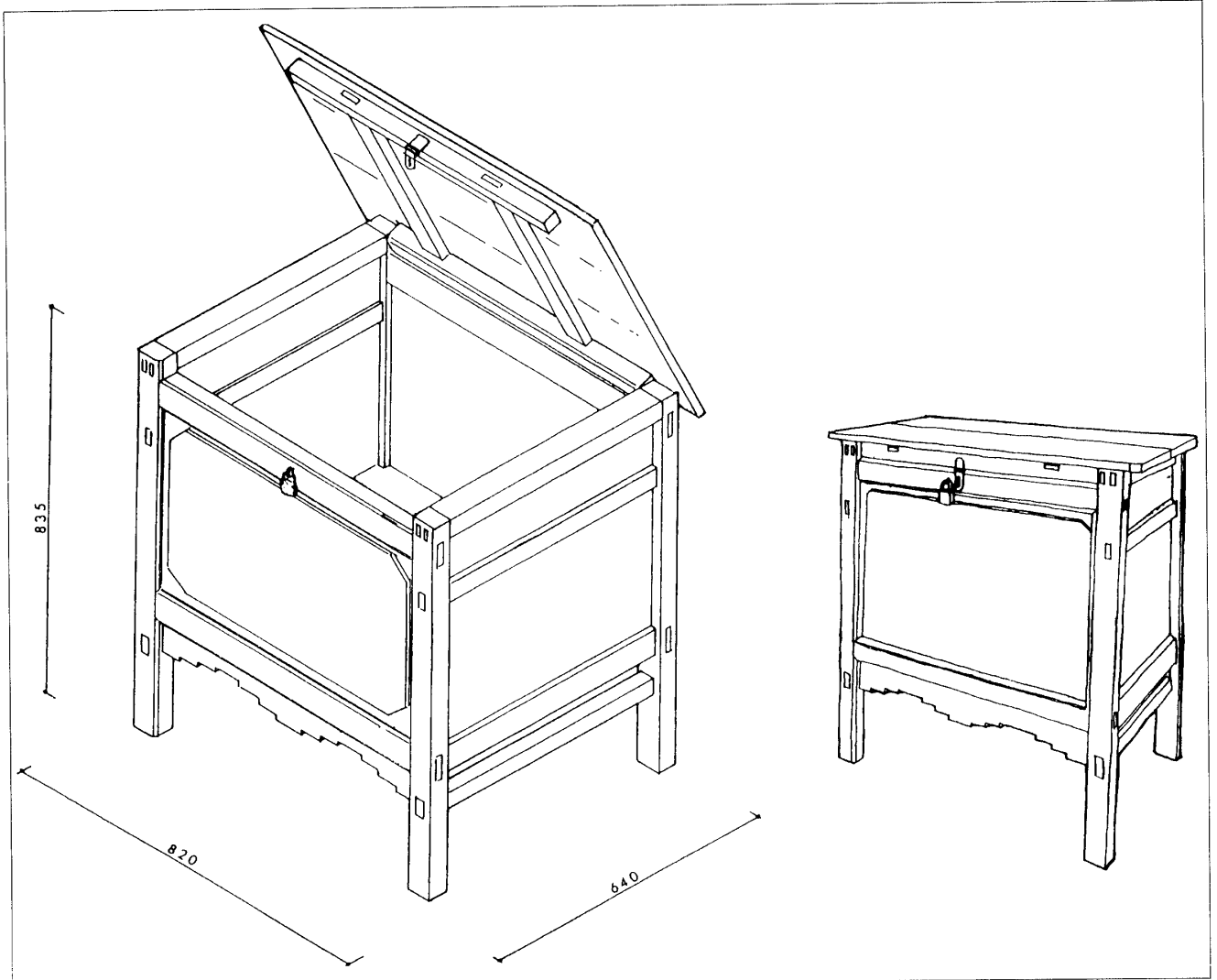


図19 框組櫃子の構造 (大理巷屏街5号 北寝室)

行李とは違い、印籠蓋のように蓋がおさまる位置が意識された造形となっている。

(図-12)のマンズンマンの蓋付き竹籠では明確ではないが、(図-13)では紐を通す竹の環が側面に見え、紐で全体を縛る用法が分かる。更に(図-15)のふたつの蓋付き竹籠は身と蓋とを紐で縛っている。潞西(芒市)の早タイ族の家で倉庫から持ち出された蓋付き竹籠は(図-15)と同様な形態である。この蓋付き竹籠がシーサンパンナの他では潞西(芒市)の1例があるのみで、漢族やイ族の土間式住居、そして大理のペー族など土間式住居では、背負い籠としての竹籠、箕、ザル等の竹の容器はみられるものの、シーサンパンナのような貴重品入れとしての竹籠は見られない。瑞麗の水タイ族の住居でも見られなかった。

もともと収納家具の歴史を見ると収納家具とは水草、穀物の茎、葛、竹、柳などの編組品であった。私達の記憶にある柳行李もそのひとつである¹⁰⁾。とくに竹の編組品はたとえば箆筒(たんす)という文字が示すように丸い竹籠=箆、四角い竹籠=筒の合成語である。そうした収納具の原形、ないしは基本的な技術による完成形を雲南省の主としてシーサンパンナの住居にみることができた。しかしこれに加えて櫃子などの木材の収納家具が並存する時代を迎えているのである。

5-2 框組櫃子

中国北方、陝西省の農村で特徴的な収納家具は板櫃(板柜)であった¹¹⁾。雲南省土間式住居の一部に共通する板櫃(板柜)はあるが、省全体として特徴的で支配的な様式としては框組櫃子である。その構造は(図-19)にみるように框が互いに通しホゾで接合され、底板が高い位置に保持されるよう脚部が伸びていることである。土間式住居の収納家具としての形態の特徴がある。収納物の出し入れは上部の蓋板(天板)を開口させる。蓋板の前の部分を持ち上げて収納物の出し入れをする。蓋板に付随する棧木の両端を円柱状に加工し、その部分を後部の縦框に挿入し回転させる。いわゆる軸吊り蝶番になっている。このような蝶番を持つとい

うことは、本体と蓋板を同時に組み立てる方法で仕上げられるということである。イ族の住居(南華県五街郷峩還廠)では家具は購入するのではなく、材料と工具を貸して大工に作ってもらうということだ。従って村の大工の手になる場合もあり、単に商品として入手するばかりではないということである。

もともと、型として定着すれば、その大きさの点で一般的に売れやすいとされるものは市場にも登場することとなる。

じつはこの框組櫃子がどのような分布をしているのか調査の後、疑問として残っている。雲南省東隣の貴州省の住宅調査の例では室内の細かい生活用具についての記述があり、同形の収納家具が見られるかも知れないと思ったが、その記述からは見いだすことはなかった¹²⁾。他の調査団の計画を知り、貴州省に同様の収納家具があったら教示願いたいと申し入れたが結果は「なし」ということであった。確かに雲南省に共通した形態であるが、雲南型収納家具と呼んでいいのかわかずに自信はない。雲南省の北部四川省の少数民族の生活の中ではこれと同形のあるようである。そして、この櫃子について、もうひとつ明確な存在を筆者は1995年確認している。台湾澎湖島の現在は使われてはいない住居で、小型のまったく同じ構造の櫃子を3例記録したのである。そのうち1例は20数年前まで住み、使用していたものである。そこには真新しい食器が入っており、その小形櫃子は食器入れだったことがわかる。中国西南部から南部に近代において主として農漁村部で使用された多目的収納家具ではなかったかということが考えられる。

ただ台湾澎湖島の例とは異なり、雲南省ではいままも現役の収納家具で、もともと出現頻度の多いものである(図-20, 21)。

シーサンパンナではこの種の収納家具の管理権は主婦のもとにあるが、土間式住居の場合明確な管理権は私の調査でははっきりしたことはいえない。

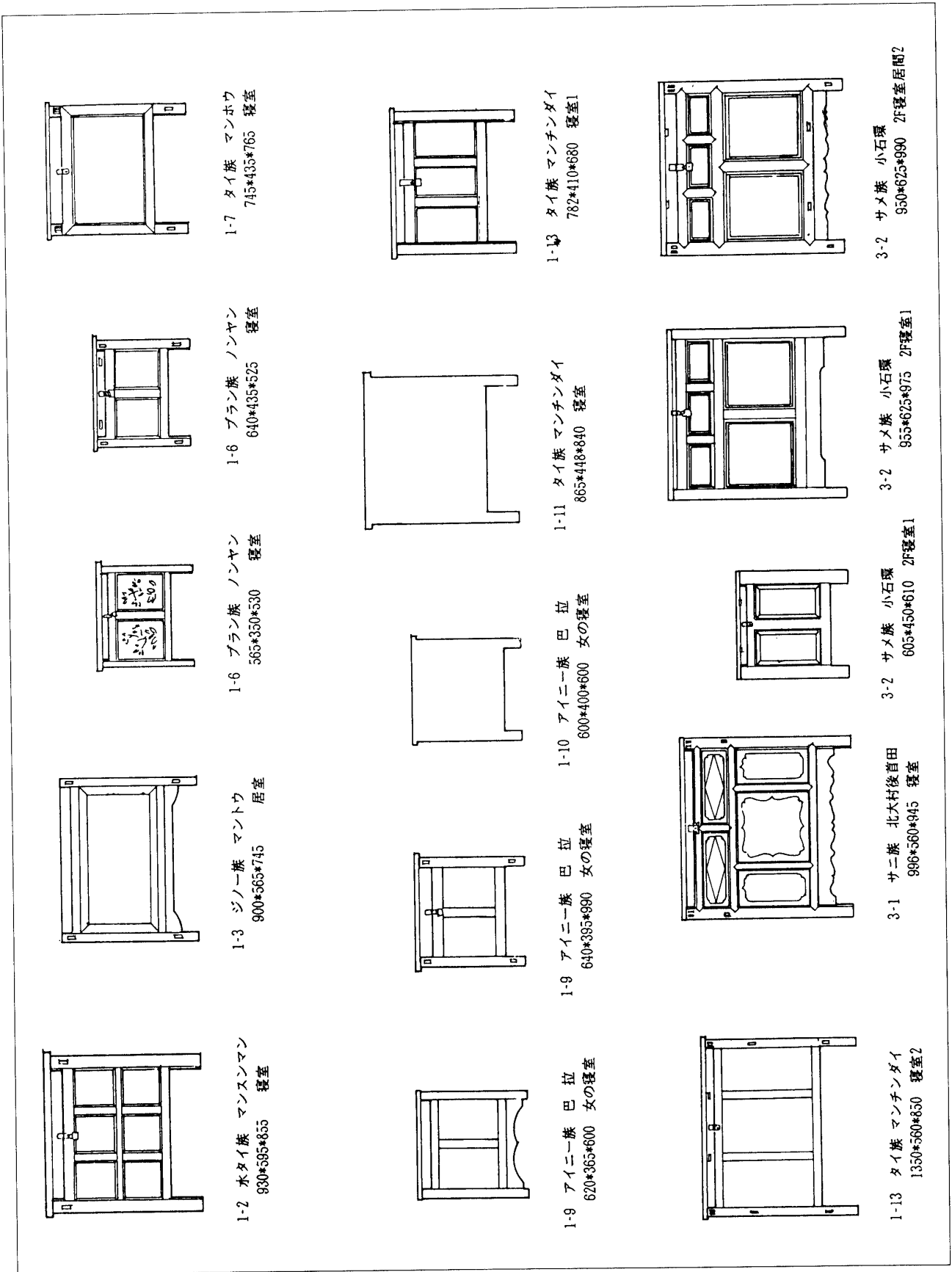


図20 框組櫃子の諸形態 I

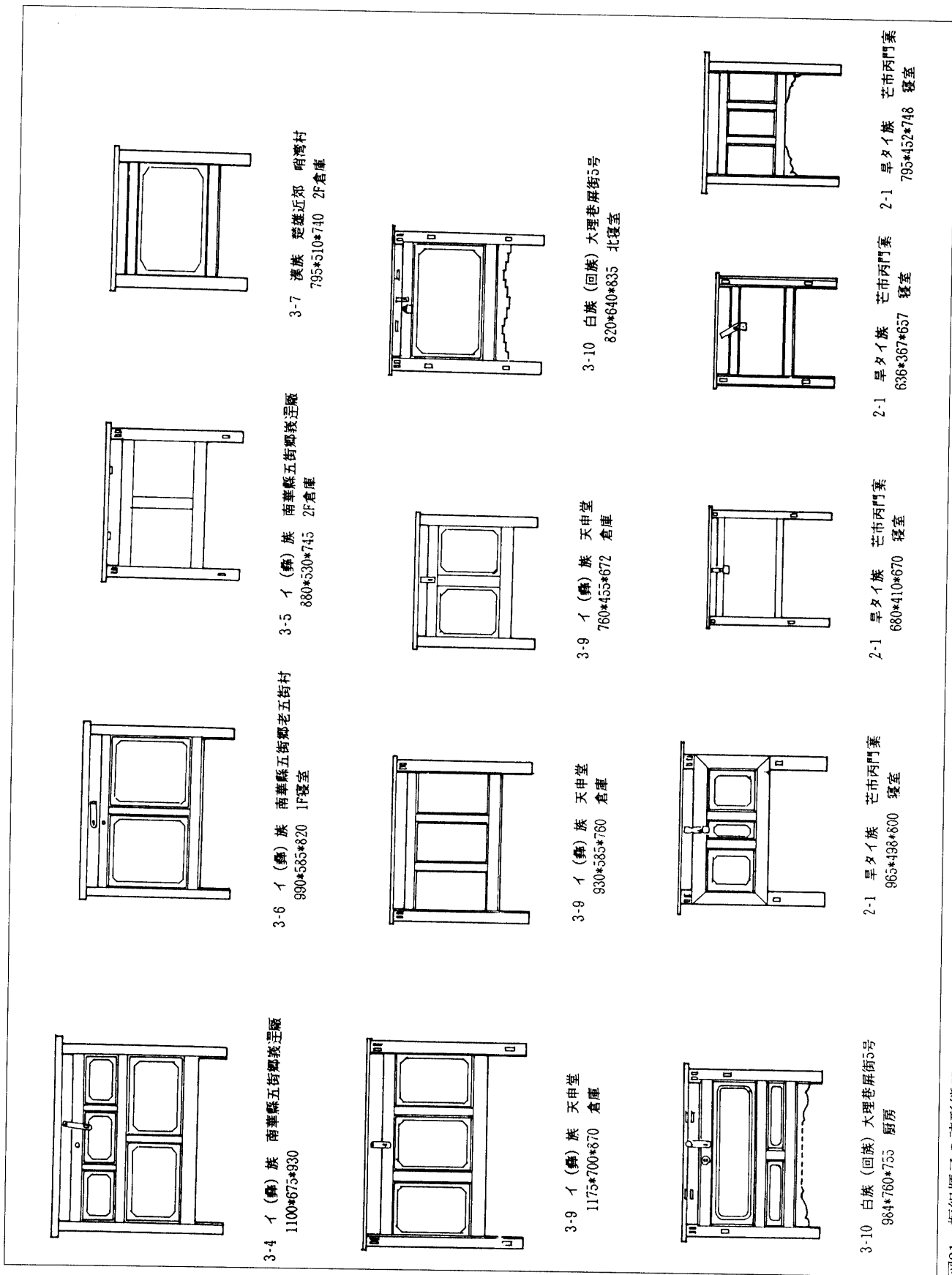


図21 框組櫃子の諸形態II

5-3 土器

土器は普通、煮炊きあるいは貯水、食物保存の容器として使用されることが多い。高床住居では土器が多く用いられている。土間式住居では漬物用の独特の形態の小振りな陶器が使用されるほかは土器の使用はみられない。

シーサンパンナタイ族の高床の階上露台(テラス)にはどの家でも同形の土器が置かれ、調理用の水がめもしくは洗顔、歯を磨くための水がめとなっている。土器の形態については、福建省などで越人の住居跡から出土する甕(かめ)とまったく同じのものであるという。シーサンパンナのタイ族の生活には、古い越人の伝統的文化が今も生きている¹³⁾。水甕としての用法に限らず、穀物の容器として使用されていることが特筆される。表-1では3例の穀物入れとなっている。

徳宏タイ族の土器もまた同様な形態だが小振りのものが多く、しかもこれは露台に水甕として置かれる場合と、集落の道端には道行く人のための飲料水をいれる甕があり、その形態がシーサンパンナのそれと同じである。穀物を入れた例はこの地ではない。

この土器の制作プロセスは上海市立博物館のパネル展示によって知ることができる。

この土器は手回しロクロの上で少しずつ粘土を上につけ足しながら、直交文を刻んだ木のヘラで叩きながら仕上げていくというものである。蹴ロクロを使うのではない。ゆっくりと回しながら砵のようなヘラで叩くことによって、形を整えていく技法である。この技法と形態があまり変化せず、今日に及んでいるのである。

5-4 現代中国様式の家具

各民族の住居平面図と表からも分かるように、蠅帳と同様、通気性をもたせる部分を持つ食品と食器をしまう食器棚や、両開き扉、あるいは引出しをもつたんすが多くの住居にみられる。これらは土器、蓋付き竹籠、框組構造の櫃子などにくらべきわめて新しい様式である。仕上げは鈍い朱色やベンガラ色のものが多く、緑色の例もある。新

たな家具生産と流通が浸透し始めているとみることができよう。

6. 結語

雲南省の収納家具として、主としてシーサンパンナで用いられる蓋付き竹籠はタイ族とこれに影響を受ける諸民族に特徴的なものである。徳宏州でもかつての収納家具であった。もともと住居も竹で作られ、生活用具の多くが竹であったし、現在では木材や金属、プラスチックに置き換わっているが、細やかな竹の編組品も多く、豊かな竹の造形文化を保持しているということが出来る。この収納家具を支えていたのは竹の編組技術であると共に空間の禁忌を前提として成立した形態であるといえよう。框組櫃子は施錠することを前提としている。もちろんすべての櫃子が施錠された使用法ではないが、空間の禁忌の形骸化が促進されるのではないかと考えられる。

シーサンパンナ、徳宏州の土器もまた伝統的で不変の形態を有する収納具である。

また、シーサンパンナでリム、サニ族語でルグー、徳宏州早タイ族語でクイウォンなどと呼ばれる櫃子「クイズ」は雲南省各地に普及している収納家具の形態であり、ここでは仮に「雲南型框組構造櫃子」としておくことにする。もっとも先述したように台湾澎湖島にも一昔前まで使用された同様の構造、形態の櫃子があり、さらに雲南省に隣接する諸省の住居の実態が解明されれば、もっと分布の広がり確認されると考えられる。そして、その構造から考えてかなり木工技術が発展した地域と民族を考慮に入れなければならない。明確な根拠を示すことができない段階だが、漢民族のデザインと技術が雲南省の少数民族に受容されていったのではないかと考えている。その形態は土間式住居を前提として成立した形態であり、高床式住居にそれが受容されるとき、なんらの変更も加えられていない。屋上屋を架すではないが、高床式住居にベッドが置かれる時の事情に類似しているのである。日本の住生活の様態と似たような現象がここでもみられる。

この框組櫃子は穀物、塩漬け肉などの食品保存、食器、換金用織り布、衣類収納などに用いられる多目的収納家具である。

徳宏州早タイ族、水タイ族の住居にみられる脚なしのミャンマー（ビルマ）型櫃子は別系統の収納家具である。この形態は高床住居のなかでの使用を前提とする形態である。

これら比較的伝統的な形式の家具が置かれるのは主として寝室である。これと対照的に、主として居間の空間に現代中国様式の収納家具が受容されつつある。

付記：本研究は平成2年度、3年度私立大学等経常費補助金特別補助(特色ある教育研究・共同研究)「中国雲南の伝統的民家に関する建築計画及び環境工学の調査研究」(研究代表者：本学工学部建築学科 浦野 良美教授)の計画班の分担課題として実施した調査研究の成果の一部である。この共同研究は九州産業大学と雲南省設計院の共同研究として実施された。その全体については共同研究成果報告書としてまとめられている。

なお、本論は1993年日本デザイン学会第40回研究発表大会で口頭発表した「中国・雲南省少数民族の収納家具—中国・雲南省少数民族の家具・生活用品その2—」をまとめたものである。

謝辞：住居の平面については計画班の調査結果を利用して頂いた。計画班の調査者は青木正夫、江上徹、上和田茂、竹下輝和、田中清章、佐藤正彦、小西龍三郎、小河修次の各先生であり、特に集落、住居の平面構成については青木正夫、江上徹、上和田茂、竹下輝和、田中清章の各先生が担当された。ここに記して、厚く御礼申し上げます。

参 考 文 献

- 1) 中尾佐助・佐々木高明『続・照葉樹林文化』日本放送出版協会 1976
佐々木高明『照葉樹林文化の道』日本放送出版協会 1982
- 2) 中尾佐助・佐々木高明『照葉樹林文化』くもん出版 1992
- 2) 雲南省設計院〈云南民居〉編写組『云南民居』中国建築工業出版社 1986
鳥越憲三郎『雲南からの道—日本人のルーツを探る—』講談社 1983
森田勇造『「倭人」の源流を求めて—雲南・アッサム山岳民族踏査行—』講談社 1982
- 3) ほどというものは、住居の中の写真撮影は行っても平面図や詳細なデータがないものもあり、家具などが概観できてもサイズなどの記録を行って得なかった場合があることによる。
- 4) 馬 寅主編 君島久子監修『概説 中国の少数民族』三省堂 1987には「その特徴は、階上と階下に分かれていて、普通は木と竹を杭柱、階上の床板、壁に使い、傾斜する屋根には杉の樹皮か茅をふいて、階上に人が住み、階下に家畜、家禽をつないだり、農具や物置にするという点がある。以前には階下に壁がなかったが、しだいにレンガや土を積み上げた壁が設けられ、屋根には瓦が葺かれるようになった。このような住居は雨が多く湿気があり、山もしくは丘陵地という風土の条件にかなうので、古くから南方の少数民族の間に広まった。今でもチワン、タイ、プイヤ、近隣のトン、スイ、マオナン、コーラオ、ミャオ、ヤオ、ジノー、プーラン、ワ、ドアン、ラフ、ハニ、チンポー、アチャン、リス、ヌー、トールン各族の間の大多数、もしくは一部に存在する。」とある。
- 5) 馬 寅『前掲書』pp.102-103
- 6) 雲南省設計院〈云南民居〉編写組『雲南民居』中国建築工業出版社1986 pp.189-206
浅川滋男「雲南地方に流れ込んだ北方文化」国立民族学博物館監修『季刊民族学』通巻72号 第19巻2号 1995 pp.42-58によると「一顆印」とは、閉鎖中庭型住宅の平面を正方形の印鑑の形にたとえた愛称であり、他の地域でいう凹字形平面の三合院や四合院にちかいコートハウスと見ていただければよかろう。とある。
- 7) 古島琴子『中国西南の少数民族—生活文化をさぐる旅』サイマル出版 1987 p.76
- 8) もっとも芒市の市場で、購入した新しい櫃子を自転車に乗せて運ぶ光景を見かけたが、それはひとりで運搬できるほどの小型の櫃子であった。このような小型の櫃子もある。また、その小型の櫃子の蝶番は金属製の平蝶番が使われ、軸吊り蝶番ではなかった。
- 9) 藤堂明保編『学研大漢和辞典』学習研究社1980

p.1116

- 10) 編組の家具については宮内愷『箱』法政大学出版局
1991 pp.44-51がある
- 11) 車政弘 石丸進「家具・室内」日中連合民居調査団編
『党家村—中国北方の伝統的農村集落』世界図書出版
公司 1992 pp.117-153
車政弘 石丸進「伝統的町家及び都市近郊農村の家具
室内について」『中国都市農村住宅調査団調査報告書』
1989
- 12) 田中淡, 浅川滋男, 宮本長二郎, 上野邦一, 周達生「中
国・貴州省の高床住居と集落—黔东南のトン族とその
周辺—」建築思潮研究所編『住宅建築』1990 4月号
pp. 4-127
- 13) 古島琴子『前掲書』p.81